季節風

最近思うこと

情報広報部　柳内　統

７月の後半に入りやっと夏らしい日が続くようになった。先日、病院学会に出席のため名古屋市を久しぶりに訪れた。愛知万博のためかホテルは一杯、飛行機も混んでいる。さすがとびっくりした。驚いたのはそれだけではない。学会初日が今年一番の最高気温。帰ってきてすぐ天塩町に学校検診に行ったが、こちらはやっぱり寒い。日本は広いと変に感心するより、地元の医師でなければわからないことが多々ある。当然のことだが地域医療の根底はそれぞれの地域にあるのである。

へき地では医師の確保がままならない。そのため一部認められた病院だけが減算して請求しなくてもよいという制度が取り入れられようとしている。これはいいことなのだろうか。患者さんの数だけ増えても忙しい思いをしているのは勤務医だけで、地方の国保病院等の方は収入が減額になる。勤務医の仕事量が増えるだけでは困る。

★　★　★

日医では医療事故のリピーターを集めて研修会を開くそうである。医療の質を担保するためにとのことだが、勤務医の置かれている環境をもうちょっと理解して欲しい。緊急の臨時手術を徹夜で行っても、翌日は朝から外来。難しい長時間にわたる手術をこなすことができれば良質な医療で、夜中、耳の痛がる子供に対応する医療は良質ではないのか。月の時間外が100時間を越えることが多く、自殺者がでるような事実に目を向けるべきではないか。医師会が開業医のための会と言われないためにも方向転換すべき時期に来ていると思う。以前、患者さんの身近にいて何でも相談に乗るという「かかりつけ医の定義」を決めたのは医師会ではなかったのか。産業医制度もある。しかしアスベストの問題に行政・業界はどのように対応してきたのか。長時間の時間外をこなし、自殺者がでる医療界の産業保健的管理はどのように考えたらよいのだろうか。

★　★　★

７月30日に第１回日本医師会男女共同参画フォーラムが開かれる。従来この方面にはどちらかと言えば無関心であった。しかし考えてみるとこれは大問題である。

少子高齢化社会が到来した今、男女共同参画について医療界も真剣に考える時期に来た。現在、医科大学の学生のうち４割弱は女性である。将来、医師の約４割が女性になるという時期が来るということである。医療界は女性医師にとって働きやすい環境にあるのだろうか。出産後に医師を止めないで働き続けて貰わなければならないが、そのときにどのような対応が必要になるのだろうか。単に更衣室を設けたり産休や育児休暇の問題だけではないと思う。復帰してもらうときに、新しい知識や技術などの取得をどのようにサポートするかを今から考え始めなければならない。